《論　文》

『日本広東学習新語書』と客家語

矢放　昭文

はじめに

神田外語大学日本研究所の共同プロジェクトとして、2019年度より同学神田佐野文庫所蔵『日本広東学習新語書』（以下『新語書』と略称）の音韻面・語彙面についての研究の一環を担ってきた。その中で特に方位詞、人称代詞などの語彙面と、標準漢語字体を方言音で読む、いわゆる訓読現象が見られること、また人称代名詞を表記する字体については、アヘン戦争前後から商業従事者の間に通行していたと推定される交易上必要な英語を学習するための会話書、例えば『華英通語』（道光己酉本1849，咸豐乙卯1855本）、などの冊子類に見られる字体に共通すること、などを報告してきた(1)。

一方、仮名音注（字音）の音韻特徴については山村敏江2019-2023(2)により詳細に研究されてきており、その着実な分析結果は方言研究の核心とも言える「基礎方言」の確定に迫っている。

『新語書』研究が共同プロジェクトとして取り上げられた理由の一つは、同書が1899年９月15日より1900年２月28日までの約半年をかけて編集された書写記録であり、日本統治時代初期の台湾での言語記録の一つとして貴重な価値を持つと判断されるからである。殊に山村2019-2023の研究成果にもとづけば、『新語書』は該当時期の台湾客家語、とくに四県と海陸の二大客家方言の特質を記録している。まさにこの点に(3)、その独自性を認めることができる。

１．背景

此処では四県・海陸二客家方言の独自性を有する『新語書』の成立経緯と、

その位置づけについて若干述べておきたい。『新語書』と同時期に当時の台灣で刊行された同類の語學書について、その概略を対比し、相対的差異を把握することは『新語書』の位置づけを探る上での根拠の一つになり得るからである。

台湾における日本統治時代（1895-1945）の、特にその初期には、統治を円滑に進めることを目的として、軍事面・治安面の必要から、さらには商業活動の需要から、様々な情報収集に迫られていた。当然ながら収集には先住者との会話・コミュニケーションが何よりも優先したはずである。

２.『台灣土語全書』

この状況を把握する上で貴重な情報を提供する文献の一つに洪惟仁1993[(4)]の研究成果がある。洪惟仁氏の克明な記載に基づけば、下関条約（1895年４月17日）が締結された1895年の１年間だけでも、『台湾語集』（1895. ７. 18、保野保和編）、『台灣地誌及台灣言語集』（岩永六一編、８月）、『大日本新領地台灣語學案内』（加藤由太郎編、９月）、『台灣土語』（佐野直記、11月）、『台灣語』（田内八百九萬編、12月）など計５種の現地語習得を目的とする出版物が刊行されている。

また董忠司2008[(5)]の報告に基づけば、同年７月刊行の『台湾語集』は下関条約締結の１ヶ月前（３月）、日本軍が澎湖列島を占拠し現地通行の閩南語調査を実施した結果をまとめたものである。

台灣語学習を目的とする語学書についてのこのような出版状況の中で、今日見ることのできる重要資料の一つに田部七郎・蔡章機共著『台湾土語全書』（出版者：小泉力松）[(6)]がある。（以下『全書』と略記する。）下関条約締結の翌年（1896）に出版されたものであるが、ネイティブ話者と推測できる蔡章機氏との「共著」を記す点は他の類似書と異なる点であり、記述内容は総合的・網羅的である。だが条約締結の翌年刊行という編纂過程の短期間が果たして何を語るのか、筆者は、何かの資料・底本等が採用されたことを推測するものである。

また「宇宙（天文）」用語から始まり、「金木水火土」という日常生活に欠くことのできない５元素を元に語彙を分類する思考を根底に持つ点は、嘗ての

「五行説」を彷彿とさせるものである。同書の成立について更に考察を進めるにはこの点も考慮すべきである。

『全書』の語学面での最大の特質は個々の字音に付加記号を用いて台灣語（閩南語）の声調を表記する点にある。台灣語声調は、上声を除き、平・去・入はそれぞれ陰陽（上平・下平、上去・下去、上入・下入）に分かれる。計７声である。上声については高低の区別がないため陰陽（上上・下上）の区別は設けられていない。また上平字には特に記号を付さない。つまり下平▲、上声○、上去△・下去－、上入●・下入｜のごとくになる。

『全書』の前半、第壱章から第十九章までは各頁縦組で上下各二段、計四段にそれぞれ二段に漢語語彙と対応する日本語を配列する。例えば「下腿」の「下」について「エ」、「腿」に「トイ」と台灣語音のルビを付ける。また「下」の右上に声調を示す付加記号「―」を、「腿」の右上には「○」を付ける。「下腿」の下段には日本語（脛）を配し「スネ」とルビを付ける。

第壱章宇宙から第十九章時令の第三四季までの前半部は、ほぼ同様方式で漢語語彙（単語）と対応する日本語を収録する。その語彙分類は、第壱章　宇宙、第弐章五行、第三章人間、第四章人生ノ関係、第五章職業、第六章農事、第七章商事、第八章文学及ヒ語学、第九章宗教、第十章建築、とつづき、さらに第十一章家具、第十二章衣服、第十三章食物、第十四章動物、第十五章植物花、第十六章商品、第十七章計数、第十八章衡量尺度及貨幣、第十九章時令、で結んでいる。

後半の「会話篇」は第壱章 日用簡易雑話　から始まり第三章 訪問応接、第五章 家事、第九章・十章 時令、第十一章 旅行地理、第十三章 商業（雑貨店）第十四章仝（小間物店）、第十五章 商業（反物屋）、第十六章・十七章 商業雑話、第十八章 軍人会話、第十九章 警官会話、文章篇、序事文作例、書簡文作例、台灣土語全書付録、と分類される。付録は地名集並ニ台灣里程表、第一外國地名、第二　支那之重要開港場及ヒ付近ノ重要港、第三台灣政治區畫、第四台灣開港場、第五　其他ノ重要港、第六台灣都邑及里程表、正誤表、から成る。

注目すべき点の一つに「第壱章日用簡易雑話」「第十六・十七商業雑話」の「～雑話」という分類標目を挙げることができる。この標目の淵源は相当に古く、江戸時代の島津藩において藩主島津重豪の指示のもとに編纂刊行された

『南山考講記』（明和４年、1787）、『南山俗語考』（文化９年、1812）など唐話辭書に収録される「長短雑話」という語彙分類を想起させるからである。

岩本真理2017[7]によれば、この二種の唐話辭書が収録する語彙と分類法の拘束力は明治に入っても発揮された。岩本2017は、両書ともに『漢語跬歩』『支那南部会話―一名南京官話』などに改称され、前者は、「微細な語彙の変更を経て、外務省管轄下の漢語学所において明治初頭の数年間教科書として使用されており」、また後者は日清戦争後に「大幅に語彙を入れ替えた後刊行された。北京官話を補完する教材の必要性に駆られた」[8]、と指摘している。『台湾土語全書』（以下『全書』と略称する）との全面的対照を行えば、同書の成立過程の一端、つまり田部七郎・蔡章機の両者がどのような資料を基にしたのか、その手がかりを得ることが出来るであろう。

３.『新語書』の分類と特質

一方で『新語書』の分類を示すと以下の如くである。

第一篇　単語、第一章単語　代名詞類、第二章動詞類、第三章　数稱類、第四章簡易形容詞類、第五章　雑詞、第一　時令ニ関スル詞、第二　方位ニ関スル詞、第三　其他副詞接續詞（以上第一冊）。

第二篇　第二篇（重複）　口句、第一章　景象、第二章　日用口句、第一起臥動作　一～七　、第二伺候、第三　飲食、第三章　語様、第一疑問、第二命令、第三　常語。

第三篇　第三篇　會話、第一章　挨拶、第二章　訪問　離別、第三章　求交、第四章人ヲ尋ヌル事（以上第二冊）、第五章　天気、第八章　朝ノ事、第九章　晩ノ事、第十章　路ヲ問フ事、 第十一章　與童子（以上宇第三冊）、第十二章　依頼謝辭、第十三章 疑惑及確定、第十四章相談、第十五章　借ル事、第十六章雇フ事。第十七章　食事、第二、第三、第四（以上第四冊）、第五、第十八章　使役、第十九章　商店、第一、第二（以上第五冊）、第三、第四、第五、第六、「第十二章（第二十章の誤り）　春ノ事」（以上第六冊）、第二十一章　夏ノ事、…、第二十四章　疾病（以上第七冊）、第二十五章　郵便電話、第二十六章　學校（以上第八冊）、第三、第四…第九（以上第九冊）、

第四篇　第四篇　諸名詞、第一章天文地理、…第十八章　礦物（以上第十冊）、第二十章　商買、第二十一章　職業其他、第二十二章　學科、第二十三章　技術者學者、第二十四章　舩舶、第二十五章　旅行、第二十六章　官名其他、第二十七章　官省其他、第二十九章　度量衡貨幣、第三十章　主ナル地名（以上第十一冊）「日本廣東　学習新語書終」

さらに「第十一冊後付録」では「篇・章名、漢語＋カナ音注」として「石観音街」「新坡下庄」…「埔頂庄」などの地名・村落名にはじまり「盡腥」（魚介類などの生臭い匂いが極度につよい）の意か？」まで、日本語にはない語彙を補充している。

また『新語書』の片仮名音注は『全書』と異なり字音の声調を記していない。この点は方言資料としての『新語書』の限界の一つである。

第一冊第一篇に設定された「單語」「代名詞類」「動詞類」「数稱類」「形容詞類」「副詞接續詞」等の分類標目は『全書』とは異なる語学知識に基づくことを物語る。すでに幕末から始まっていた英学知識が急速に普及し広がっていたことに由来する分類法であろう。

だが『新語書』収録の語彙、文体、およびその内容については『新語書』独自のものか、あるいは『台灣土語全書』のように、よりどころとした資料があったのか、その有無をも含めて更に追求することが重要である。

短文の意味・内容を通じて判断するに、『新語書』では、商業取引を中心とする日常生活に必要なきめの細かい表現に文体の特色を読み取ることができると同時に、当時台灣に進出した日本人の新たな植民地についての考え方の一部を知ることが出来る点も、『全書』にない特色だから、である。

4．客家語について

すでに矢放2020[9]で言及したが、⑴自称代詞の語形、音節末尾に /-i/ を持つこと、⑵撮口呼を欠くこと、⑶常用の全濁声母が有気音で記されること、⑷中古音の以母、影母、云母字がサ行濁音で表記されており Fricative Retroflex（捲舌音）または Alveolar（歯茎口蓋音）であったと推定できること、などの点から、『新語書』仮名音注は客家方言の特徴を示すものと結んでいる。

『新語書』が多数収録する「個：カイ*/kai/」の字音例についても、矢放2020「1.2 類別詞（助数詞または量詞）」において類別詞として用いられていることを指摘したが、此処では遠称の指示代詞として機能していることを指摘したい。

すべてを挙げることは避けるが、第一冊だけでも「各個：コッカイ」「這個：リーカイ／ツーカイ／チェーカイ」「彼個：キーカイ／ピーカイ」「彼彼個：キーキーカイ」を認める。「那一個：ナイカイ／ナーヂツカイ」についても「ナイカイ：/*nai kai/」は「一」を省く口語音・「ナーヂツカイ」は「一」を「読音」として読んでいる。

「個」についての漢語方言での音的根拠としては、先稿と同様に張雙慶・荘初昇共著2003『香港新界方言』の報告例を援用することができる。同書によれば、その60頁収録「個：果開一去箇見」について荔枝荘、麻雀領、齒泥坪、楊小坑の四カ所で /kai^{53}, kai^{55}/ の語形が報告されている(10)。

また近年公刊された荘初昇・貝先明・徐国莉編2022によると、新豊、翁源に /kai^{51}, kai^{46}/、潮州・饒平・汕頭・潮陽・揭西・普寧・恵来・海豊の白話音に高平調 /kai^{55}/、陸豐 /kai^{13}/ を認めることができる。いずれも客家音、或いは客家音に淵源をもつ白話音と見なすことができる(11)。

荘初昇・黄婷婷2014は、客家語について「地理的環境、社会条件、族群心理などを合わせた条件の下で、客家方言は多数の古漢語語彙を保持している」と指摘したうえで、同書が報告するバーゼル教会所蔵『啓蒙浅学』1880年漢字本を資料として、「箇［kai^{4}］は量詞として採用された俗字であり、今日の普通話（標準中国語）の「個：个」に相当し、また「的」にも相当するだけでなく、遠称（那：ソレ、アレ）の指示代詞としても機能している、と報告する(12)。『新語書』でも量詞「個：カイ /*kai/」として使われる例は全冊を通じて多数に及んでおり、客家方言の特徴ある語形であると言える。

5．客家語の定義

いわゆる「客家」は「土着」（広東では「本地」）に対して使われる言葉である。「先入为主，后来为客」という言葉も伝えられるが、先住民からみれば、後から来た移住者は「よそ者」であり、勢いとして平野ではなく農耕に困難を

伴う山間に追われて生活する人々が多かった。

客家研究書の嚆矢として知られている羅香林『客家研究導論』の考証をよりどころにすると[13]、その先祖は古代の中原一体に居住していた漢族である。計5回に渡り北から南へ、南から西（四川、湖南、広西）と東（台灣）へ移住を繰り返した、と伝えられる。長期間にわたり複雑な遷移の経緯を伴うが故に、その言葉には多数の複雑な要素が含まれる、とも考えられている。他の漢語方言、例えば呉語、粤語、閩語、官話などに比して、特殊扱いされるのはこの歴史的な遷移経過を前提とする成立背景に起因する。殊に詹伯慧 1981、袁家骅 2001の研究成果にはこの点を前提としている[14]。

一方、客家語の特質を周囲の諸方言より「切り出すことを目的とする」論考に J. Norman 1986を挙げることができる[15]。同論考の、必要・十分の二条件を満たしてはじめて客家語を規定できる、という思考基盤は在来の漢語方言研究を鋭く整理する力を持しており、改めてその論理的卓越性に挑むことは難しい。

梅縣客家語を客家語の代表とする在来の客家語研究に基づけば、大方の客家語では中古音歯音二等、三等、舌音はすべて合流し、舌歯音（舌尖音）一系列 /ts-, tsʰ-, s-/ のみを有する、と報告される[16]。

一方で J. Norman 1986は楊時逢 1957の報告[17]に基づき、台湾海陸客家語と長汀方言に /ts, tsh, s/ と /tʃ, tʃʰ, ʃ/ の舌歯音二系列を認めている。山村 2019-23が報告する『新語書』の舌上音・歯音三等一類の詳細な分析も、片仮名表記という表音上の制約が存在するにもかかわらず、歯音二等一類と舌音・歯音三等一類を前提としつつ、更に後者の中で20世紀初頭の四県音と海陸音の混在状況、接触状況を解明すべく、該当韻攝全般にわたり詳細に分析を進めており、その結果は『新語書』の「基礎方言」を定める上で積極的価値を有している。「基礎方言」の割り出しに成功している、と言っても過言ではない。

小結

『新語書』は日本統治時代初期の台灣客家語海陸方言を基盤とするものの、言語資料としてはおそらく未定稿であるにも関わらず、逆に字音、字体の混在する状況を生々しく読者に提供する希有の資料ということができる。当時の商

工業者の間で通行していた書面言語と、進出した日本側の調査主体の思考回路を探る貴重な資料としての価値を将来的にも保持するものである。

註

（１）矢放昭文 2023「『日本広東学習新語書』の人称代詞複数形と訓読について」神田外語大学『日本研究所紀要』第15号、2023年３月、頁138-132（171-177）。

（２）山村敏江 2019「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』所収の符号仮名（1）」神田外語大学『日本研究所紀要』第11号、頁198-181(53-70)、2019。山村 2020「仝（2）」第12号。山村 2021「仝（3）」第13号。山村 2022「仝（4）」第14号。山村 2023「仝（5）」第15号。

（３）山村 2022・2023頁130-94（117-153）、2023。

（４）洪惟仁 1993「日據時代的台語辭典編纂」（『閩南語經典辭書彙編・５』収録、頁１-30、1993年、武陵出版有限公司）

（５）董忠司 2008「日本领台之初的台湾闽南语记音符号与日台语音对比—以语言接触下的《台湾土语全书》所用音标为例」『客語縱橫 第七屆國際客方言研討會論文集』張雙慶・劉鎮發主編、香港中文大學中國文化研究所吳多泰中國語文研究中心刊、頁225-250

（６）『台灣土語全書』1896年田部七郎・蔡章機共著、小泉力松出版、国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/869417/6l?tocOpened=1

（７）岩本真理 2017『南山俗語考・翻字と索引』中国書店。

（８）岩本真理 2017同書「はじめに」L. 14-19.

（９）矢放昭文 2020「『仝（2）」神田外語大学『日本研究所紀要』第12号、2020年３月

（10）張雙慶・莊初昇共著 2003《香港新界方言》（香港商務院書館）。同書は1997年の香港返還後、香港の言語生活が以前と異なる変化をはじめていることを念頭に据えつつ、新界住民が使用する方言を総合的に調査した報告書である。当時の新界では使用人口の多い方から順に客家語、圍頭話（粤方言系統）、蛋家話（水上廣東話）、福佬話（閩南方言系統）と位置づけられるという。（同書、p 5, 8）

（11）莊初昇・貝先明主編、徐国莉副主編 2022《中国語言資源集・広東・語音２》（中国社会出版社）同書は広東省全域より72の調査地点を選び進められた調査報告であ

り、下位区分や先験的方言区分などを外している点で画期的価値をもつ。方言地図・方言地理学的思考に基づく調査報告としてその価値を活用することが出来る。

(12) 荘初昇・黄婷婷 2014《19世紀香港新界的客家方言》广东人民出版社。その第六章：〈巴色会客家方言文献的方言用字〉。页345-347。

(13) 羅香林 1933《客家研究導論》集文書局出版、1975台灣一版。

(14) 詹伯慧 1981《现代汉语方言》湖北人民出版社。页148-153。袁家骅等 2001《汉语方言概要・第二版》语文出版社。页145-176。

(15) Jerry Norman 1986 "WHAT IS A KEJIA DIALECT?" The Second International Conference on Sinology, Academia Sinica. 中央研究
第二届國際漢學會議論文 民國七十五年十二月廿九至卅一日。项梦冰译〈何谓客家话？〉《语言学论丛》(第二十八期、2003年) 页340-365。

(16) 詹伯慧 1981 p152、袁家骅 2001 p 148

(17) 楊時逢 1957《臺灣桃園客家方言》(中央研究院歴史語言研究所單刊、甲種；22) 中央研究院歴史語言研究所、1992. 12 景印版。

[付記]：小稿は JSPS 科研費（課題番号21K00479）による研究成果の一部である。